



今日は柔道大会出場おめでとうございます。みなさんどこかで柔道ルネッサンスという言葉を目にしたことがあると思います。柔道ルネッサンスとは嘉納治五郎師範の理想の原点、柔道を通して人づくり、人間教育これを改善していこうという運動である。

5、6年前までは柔道をしている人のマナーは高いものではなく、あまり良いものではなかった。非常に低かった。柔道の大会で体育館や武道館を使うと使い終わったあと、非常に汚かった。選手や指導者、観客のみなさんが柔道の人を使うとき一番マナーが悪い。体育館、武道館を貸したくないといわれていました。なぜマナーが低くなったのか。人づくりの活動の柔道がなぜこのようになったのか。それは、われわれ指導者があまりにも勝ち負けだけにこだわって本来の柔道を通しての人づくりという精神を忘れたことにあるのではないか。これらのことを反省して2001年に講道館全柔連柔道ルネッサンスができた。多くの人の理解、協力があり、柔道人のマナーが少しずつ改善されてきています。8月に千葉県でインターハイが行われた時に嬉しいことがあった。5、6年前までは、柔道の試合には貸したくないと言っていたインターハイの会場の靴やスリッパがきれいに並び、柔道の試合で使った後は、汚いということがなくなった。これは柔道の指導者、保護者の方々、柔道に関係している多くの方々が本来の柔道に気づいて行動を起こされたことがきっかけである。日本武道館で試合があった時もスリッパがきちんと並んでいました。柔道で勝つことも大切で強くなるのも大切だが、しかし、それだけでは十分ではない。柔道を通して培ったものを学んだことをこれからの生活で生かしていくことが大切である。柔道をやっている人はみんな挨拶がきちりできる。それは自分の先生だけでいけない。お父さん、お母さんきちっとできなければいけない。電車やバスでおじいさんおばあさんに席をゆずったり、重い荷物を持っていたら代わりに持ったり、あるいは誰かがいじめられていたら、「やめろよ」とそういう風なものが道場で培ったもの、得たものである。また困った人や弱った人がいたら進んで力を貸す、それが、本来創設者が認めた、われわれが期待したものではないかと思えます。柔道が大好きで一生懸命、柔道に取り組んでいる選手の多く、彼等や彼女達が柔道をしたことが将来の財産になる。われわれ柔道ルネッサンスは勝ち負けだけでなく柔道を通して人づくりを大事にしていただければ良いと思って柔道ルネッサンス運動に取り組んでいる。これからの多くの大会で日本の中学の最高の選手、指導者として畳の上だけでなく畳をおりても最高の選手としてのマナーを守ってほしいと思えます。そして一生懸命練習して培ってきたものをこの畳の上で相手に向かって行って向かって行って全部出し切ってほしいと心から願っています。選手の検討を心から期待して終わりにします。